

「ハノイ農業大学強化計画」短期専門家派遣の記 (特別紀行)

江頭, 和彦
九州大学大学院農学研究院

<https://doi.org/10.15017/4344>

出版情報：九州大学大学院農学研究院学芸雑誌. 59 (2), pp.283-299, 2004-10-01. 九州大学大学院農学
研究院
バージョン：
権利関係：



特別紀行

「ハノイ農業大学強化計画」短期専門家派遣の記

江頭和彦*

九州大学大学院農学研究院植物資源科学部門植物生産科学講座土壌学研究室

(2004年6月30日受付, 2004年7月13日受理)

Memory of a Short-Term Expert Dispatched to “HAU-JICA ERCB Project”

Kazuhiko EGASHIRA*

Laboratory of Soil Science, Division of Soil Science and Plant Production,
Department of Plant Resources, Faculty of Agriculture,
Kyushu University, Fukuoka 812-8581, Japan

はじめに—「ハノイ農業大学強化計画」と国際協力への関わり

「ハノイ農業大学強化計画」は、JICA（当時の国際協力事業団、2003年10月1日より独立行政法人国際協力機構）のプロジェクト方式技術協力（プロジェクト方式技術協力は2002年度で中止され、それ以後は技術協力プロジェクトとして一括される）として、1998年9月1日より2003年8月31日までの5年間実施された。「ハノイ農業大学強化計画」では、九州大学大学院農学研究院と熱帯農学研究センターが、山口・佐賀・宮崎・鹿児島・琉球の各大学農学部とコンソシアムを形成して、ハノイ農業大学の農学部、土地・水資源管理学部（農学部の一部を取り込んで、2003年土地資源環境学部に変更）、経済・農村開発学部の3学部を対象に、教育研究支援を実施した。「ハノイ農業大学強化計画」は、その評価は問われるとしても、自然科学と社会科学が協同して取り組んだ初めてのJICAプロジェクトとして特徴づけられる。

「ハノイ農業大学強化計画」には、事前調査（1996年9月）（国際協力事業団、1996）と長期調査（1997年4月～5月）（国際協力事業団、1997）に参加して、その立ち上げに関わり、運営指導調査（中間評価）（2001年6月）（国際協力事業団、2001）の団長として中間評価を担当した。さらに、2002年9月29日から10月26日まで、土地・水資源管理分野の短期専門家として派遣された。2003年4月～8月には、国内支援委員

会の最後の委員長を務めた。その意味では感慨深いプロジェクトである。

九州大学大学院農学研究院は、教育研究に加え、国際協力、社会連携、地域貢献をその活動の柱に置く。私自身は国際協力に重心を置き、これまで、JICAの短期専門家、文部科学省の海外学術調査や在外研究、学術交流協定調印等の形で関わってきた。本記事では、国際協力の一端として、2002年9月29日から10月26日までの4週間、「ハノイ農業大学強化計画」に短期専門家として派遣された時の活動の概要を記述し、日々の記録を「ハノイ日記」として綴る。

活動計画と活動報告

短期専門家活動では、活動の始まりに活動計画を作成する。そして、活動終了に際して活動報告を提出する。活動計画や活動報告の内容は派遣の時期において少しずつ変わってきた。今回の派遣においては、赴任時に、短期専門家活動計画書（Work Plan）をカウンターパートと相談して英文で作成し、「ハノイ農業大学強化計画」の日本側チームリーダーとハノイ農業大学学長に提出した。帰国前に、短期専門家英文報告書（Short Report）を作成してリーダーと学長に提出し、専門家業務完了報告書を和文で作成し、リーダーに提出した。Work PlanとShort Reportは一定のフォームがあり、それに従って作成する。専門家業務完了報告書は、詳細な作成要領があり、それに従って書くことになる。Work Planには、「ハノイ農業大

*Corresponding author (E-mail: kegashi@agr.kyushu-u.ac.jp)

学強化計画」のプロジェクトデザインマトリックス(PDM)の活動欄に記された内容に即して、派遣期間中に行う活動項目を挙げ、活動を通して予期される成果と実施スケジュールを記す。Short Reportには、活動項目、活動を通してカウンターパートに移転された技術内容、活動結果、提言を記載する。専門家業務完了報告書は、今回の私のように派遣期間が1ヶ月未満と短い場合には、専門家活動内容と成果達成状況が主な記載内容となる。ただ、今回の私の派遣はやや特殊なケースで、2003年3月に行われた(派遣時では行われる予定の)終了時評価(国際協力事業団農業開発協力部、2003)に向けての、土地・水資源管理分野の教育研究支援活動の取り纏めが最も主要な活動であり、このことは、杉浦リーダーからの要請であった。

活 動 内 容

土地・水資源管理分野の短期専門家として行った活動と活動の指針となる研究課題について、2003年2月18日に、九州大学大学院農学研究院で開催された「ハノイ農業大学強化計画専門家帰国報告会」での報告用に作成したレジメの内容を一部修正して記述する。

土地・水資源管理分野の研究課題

「土壌及び環境保全」

課題1：紅河デルタにおける環境保全と土壌及び水の汚染防止

課題2：退化土壌並びに酸性硫酸塩土壌の物理的、化学的及び鉱物学的性質

「植物栄養」

課題3：問題土壌における作物生産制限要因の解明と改善

課題4：作物生産性向上と環境保全のための化学肥料の合理的施用法

「水管理」

課題5：紅河デルタにおける効率的作物生産のための水管理並びに紅河上流域の土壌侵食防止

活動内容

1. 土地・水資源管理分野の技術協力／支援活動の取り纏め

終了時評価に向けて、「ハノイ農業大学強化計画」の土地・水資源管理分野の技術協力／支援活動について、その時までの長期及び短期専門家の報告書、カウンターパート教官への聞き取りを基に取り纏め、報告書(案)を作成した。

研究支援については、それぞれの課題を対象に、

1. 課題設定に係るベースライン調査、運営指導調査時の評価、中間評価；2. 技術協力／支援の成果；3. 機材の使用と維持管理指導；4. ワークショップ／セミナー開催；5. 国際／国内シンポジウムへの出席；6. 技術移転の内容；7. テクニカルレポートの作成；8. フィールド調査；9. 学術論文の公表；等について記述した。取り纏め結果を基に、課題毎に、やや甘く(研究支援された内容に対して)と厳しく(課題全体として)目標達成度を評価し、パーセント表示で示した(後者を()内に示す)：課題1、95～100%(80%)；課題2、85～90%(60%)；課題3&4、約90%(60%)；課題5、85～90%(70%)；「紅河上流域の土壌侵食防止」に限れば90%)。

教育支援では、1. ベースライン調査、運営指導調査時の評価、中間評価；2. モニタリング(教材・シラバス等)；3. シラバス・教材の検討と改良；4. 実験書作成；について記述した。取り纏め結果を基に、やや甘く(教育支援された内容に対して)と厳しく(全体として)目標達成度を評価し、パーセント表示で示した(後者を()内に示す)：85～90%(70%)。

研究施設・研究機材の維持管理体制については、1. 中央実験室と供与機材設置に係るベースライン調査、運営指導調査時の評価、中間評価；2. 土地・水資源管理分野の中央実験室・機材維持管理に係る調査；について記述した。取り纏め結果を基に、やや甘く(技術移転された内容に対して)と厳しく(全体として)目標達成度を評価し、パーセント表示で示した(後者を()内に示す)：90～95%(85%)。

2. 灰色退化土壌の現地調査と断面観察

研究課題2に関連して、10月16日、ハノイ省(Ha Noi province)ソクソン県(Soc Son district)タインファン社(Thanh Xuan commune)で、カウンターパート教官らと、灰色退化土壌(Grey degraded soil)の現地調査を行い、圃場を選んで深さ1mまでの穴を掘り、断面を観察した。

3. 灰色退化土壌改良のためのポット栽培試験

研究課題2に関連して、灰色退化土壌の現地調査時に表層土壌を採取し、ハノイ農業大学へ持ち帰った。土壌改良資材として携行機材で持ち込んだゼオライトを添加し、灰色退化土壌への改良効果を検するために、水稻ポット栽培試験を開始する計画でいたが、計画だけに終わった。本記事の執筆時、水稻ではなく大豆を用いてポット栽培試験を行うと聞いてはいるが、未だ

何らの試験結果も見えていない。

4. 紅河デルタ農業地帯の水質調査

研究課題1に関連して、ハノイ省ソクソン県タインスファン社(10月16日)、ハノイ省ザーラム(Gia Lam)県フードン(Phu Dong)社(10月23日)、バクニン(Bac Ninh)省ティエンドウ(Tien Du)県フーラム(Phu Lam)社(10月23日)で、カウンターパート教官らと、農業用水(灌漑/排水水路、池)と地下水(農家の井戸水)を採水した。土地・水資源管理学部の中央実験室に持ち帰り、pH、硝酸イオン濃度、アンモニウムイオン濃度が、カウンターパート教官らによって測定された。

5. セミナー開催

研究課題1と2の、九州大学大学院農学研究院でのカウンターパート研修と博士論文研究の成果の公表を目的に、土地・水資源管理学部の関連の教官と大学院生を対象に、10月4日と11日の2回セミナーを開催した。表題は以下の通りである:「ヴィエトナム国の灰色退化土壌について」と「ヴィエトナム国における重金属集積と土壌の粘土鉱物性」。

6. 北部中山間地帯の土地利用調査

研究課題5に関連して、10月18日~21日の日程で、カウンターパート教官らとラオカイ(Lao Cai)省サパ(Sa Pa)県を訪れ、北部中山間地帯を代表する地区として、地形・地質、土地利用を調査し、県の人民委員会関係者と会談し、立地環境や農業についての情報を入手した。

7. 成果の公表

帰国後、黒澤靖氏(九州大学熱帯農学研究センター)と連名で、以下の論文を作成あるいは作成中である。

1. 「ヴィエトナム北部山地の立地環境と傾斜地農業—サパを事例として—」, 九州大学大学院農学研究大学院学芸雑誌, 第57巻2号
2. 「ヴィエトナム紅河デルタ農村における水質調査の方法と実際」, 日本土壌肥科学雑誌, 第74巻4号
3. 「Monitoring of Inorganic Nitrogen Levels in the Surface and Ground Water of the Red River Delta, Northern Vietnam」, Communications in Soil Science and Plant Analysis, 第35巻11・12号

執筆時、1と2は既に公表され、3は印刷中である。

ハノイ日記

2002年

9月29日(日)

ハノイへ向けて出発する。福岡ともしばらくはお別れである。JICA 短期専門家派遣では、通常、前日東京のJICA 本部に立ち寄り、短期専門家の委嘱状をもらい、出発前打ち合わせをして、翌日成田から出国する。これまでは全てそうであったが、今回は直接福岡から出国する。JICA も経費節約になり、私も余分な日程を過ごさなくて済む。ただ、査証付き旅券の受け取りが出発ぎりぎりになり、少しやきもきさせられる。

JL753便、10時55分福岡国際空港を離陸する。JICA の短期専門家や調査団派遣あるいは在外研究・海外学術調査での渡航では、大抵は連れがあったが、今回は一人旅。10時58分筑後川上空を通過。蛇行する流れの先には有明海。対岸に諫早干拓、雲仙岳は雲に隠れて見えず。11時ちょうどに矢部川上空を通過し、筑肥山地にかかる。11時5分雲の中に入り、15分雲上となる。JL753便のビジネスクラスはがらがら。機内食もそれほどおいしくはなく、機内サービスは、総じて、これまでの派遣で成田から出国の時機上したタイ航空やキャセイ・パシフィックに劣るという印象。

そのまま雲の上を飛び続け、13時ちょうど(現地時刻)に香港国際空港に着陸。その前時計を1時間遅らせる。香港—ハノイ間はCX791便。ヴィエトナム航空とキャセイ・パシフィックの共同運航便で、スケジュールは全てアオザイ姿。定刻14時15分発が遅れて14時55分の表示。出国の数日前から軽いぎっくり腰を患い、空港では腰をかばって歩き回らず、じっと座って待つ。機内に入ってもなかなか飛び立たず、離陸したのは15時34分。離陸してすぐ左手に香港島。しかし、すぐに雲の下に隠れる。そのまま雲の上を飛び、ヴィエトナム領空に入った頃から雲が切れる。北部山岳地帯から紅河デルタ地域へ、じつくりと眺めながら飛び、わずかに雲がかかって霞み、スライドに撮るにはむずかしいであろう。時計を更に1時間遅らせる。

16時5分(現地時刻)ハノイ、ノイバイ(Noi Bai)国際空港に着陸する。着陸前、地上温度32℃との機内放送。空港ターミナルビルはきれいに改装されていた。東南アジア大都市の発展は目覚しく、インフラストラクチャの整備が急ピッチに進む。日本だけが相対的に取り残されていく。その分、ヴィエトナムでも、都市と農村の格差が確実に広がっていく。改装されたノイ

バイ空港、機内からゲートを通してそのままターミナルビルに入る。改装されてもサービスは改善されず、荷物を取ってターミナルビルの外へ出た時は、着陸して30分以上経ち、16時45分ぐらいになっていた。空港では、高橋和久調整員の他、グエン・ヒュー・タインさん (Nguyen Huu Thanh ; 「ハノイ農業大学強化計画」のカウンターパート研修で、1999年11月～2000年5月大学院農学研究院に在籍) とホー・ティ・ラム・チャ (Ho Thi Lam Tra ; 大学院農学研究科博士後期課程 (国際開発研究特別コース) に1997年10月～2000年9月在籍) 夫妻が出迎えてくれた。

タクシーでハノイ市内に向かう。空港から、タインさんはタクシーに同乗し、チャ夫妻はオートバイの二人乗り。道路の両側には田園が広がる。この時期、夏稲の刈り取りが進む。所々に墓所を見る。紅河にかかるタンロン橋 (Cau Thang Long) を渡ってハノイ市内に入る。市内に入ると、一気に人が、車が、バイクが増え、静から動へと移り変わる。しかし、訪越7度目ともなると、さしたる感動も湧かず、17時半頃ホテルに着く。ホテルはハノイホテル (河内大酒店)。1997年4月 (訪越3度目)、2001年9月 (同6度目) に次いで、今回は3回目。部屋は718号室。ダブルベッド、机・椅子、円卓と2脚の椅子、テレビ、冷蔵庫、電話が備わり、収納箱、クローゼットとバスルームが付き、空調設備が完備し、湯茶と朝刊のサービスがあり、当座の单身生活には困らない。1泊の宿泊費は、朝食込みで、JICA 割引の45USドル。2人利用では、合わせて55USドル。宿泊費割引に加え、1週間に1枚割合での10USドル相当の食事クーポン券の配付、クリーニング代の一定額までの無料などの JICA 特典が付く。至れり尽せりである。タインさんとチャに手渡すお土産を取り出し、18時半に3人とホテルのロビーで待ち合わせ、ホテル近くのヴィエトナムレストラン Pumpkin Cafe に夕食を取りに行く。その前、ホテルのフロントで1万円を両替。1,150,000VN ドンがくる。夕食は、生ビールを飲み、食事を楽しみながら、1年振りの再会を喜ぶ。部屋に戻り、家へ国際電話をする。とにかく4週間働くしかないと心に誓う。

9月30日 (月)

日本では、平成14年度21世紀 COE プログラムの採択結果発表の日である。朝7時過ぎから朝食。食事の質量ともに、昨年の9月から更に落ちる。従業員も全くの愛想無し。ハノイホテルの相対的な地位の低下を想わせるのに充分である。8時半過ぎにホテルを出て、

杉浦リーダーの同行を受けて、JICA ヴィエトナム事務所を表敬訪問する。所長は不在で、担当官としばらく歓談。終わってハノイ農業大学 (Hanoi Agricultural University : HAU) へ向かう。チュオンズオン橋 (Cau Chuong Duong)、紅河の水位は中州のかなり下まで下がっていた。HAU では、午前中は特にすることはなく、杉浦リーダーらと懇談。派遣時の長期専門家は、杉浦已代治リーダー、瀬古秀文専門家 (農学) と高橋和久調整員の3人。お土産に持参した明太子を手渡す。

午後2時過ぎにダン・ヴー・ビン (Dang Vu Binh) 学長を表敬訪問し、九州大学英文カタログと大学院農学研究院等概要を渡し、お土産としてフロッピーディスクを手渡す。午後3時から、土地・水資源管理学部 (Faculty of Land and Water Resources Management) に、グエン・ティ・ヴォン (Nguyen Thi Vong) 学部長を表敬訪問し、短期専門家としての活動について、ドオ・グエン・ハイさん (Do Nguyen Hai ; 「ハノイ農業大学強化計画」のカウンターパート研修で、2001年2月～8月大学院農学研究院に在籍)、グエン・タット・カインさん (Nguyen Tat Canh ; 同じく2001年7月～2002年1月在籍) を交えて話し合う。午後4時頃から土地・水資源管理学部の中央実験室 (以下、単に中央実験室と表す) に移り、黒澤靖さん (1999年3月～2001年2月「ハノイ農業大学強化計画」の長期専門家として派遣)、ハイさん、カインさんらと水質調査について打ち合わせる。結局、今日は表敬訪問だけで終わる。夕刻、Brother's Café で私の歓迎会。昼食の日本食レストランの弁当が腹に残り、食がほとんど進まず、ご馳走を前に心残りであった。

10月1日 (火)

前日の電話での約束を受けて、KUARO ヴィエトナム事務所 (Kyushu University KUARO Project Office in Vietnam) の秘書のトゥイさん (Ms. Thuy) に、朝8時にハノイホテルまで来てもらい、緒方氏から預かってきた KUARO ヴィエトナム事務所の3ヶ月分 (8月～10月) の家賃3,180USドルを渡す。HAU では、午前中は主に中央実験室で、午後は本館2階の一隅にあてがわれている JICA 専門家室で仕事をする。昼食は、タインさんと一緒に、HAU 構内の食堂でフォーガー (鶏肉入り米細麺うどん) を食す。HAU での仕事は次の通り：

・土地・水資源管理学部の教官と学生に対して行うセ

ミナーの原稿のプリントアウト；

- ・セミナーで用いる表の OHP シートの作成；
- ・高橋調整員立ち会いのもと、携行機材の開梱とチェック（全て破損することなく届く）；
- ・Work Plan の作成。

夕食は、ハノイホテルの近くに最近できたと思われる韓国レストランでビビンバを食す。部屋に戻り、入浴、洗濯をして、資料に目を通す。21世紀 COE プログラム、ヒアリングまで進んだが、結局採択されず、リーダーとしての力のなさ、残念だが致し方なし。

10月2日（水）

朝8時に、昨日の Ms. Thuy にハノイホテルまで再び来てもらい、支払った3ヶ月分の家賃の請求書、領収書、支払い完了書を受け取る。HAU では、先ず、Degraded soil（退化土壌）に関する、日本側専門家と HAU 側カウンタートパートによる共同研究を取り纏めた Technical Report No.1 中の関連の報告に目を通す。Work Plan についてタインさんと協議し、必要な修正を加えて完成させる。昼食は、昨日と同じ食堂で、タインさんとフォーボー（牛肉入り米細麺うどん）を食す。午後は、2時半から5時近くまで、JICA の長期専門家として農業農村開発省（Ministry of Agriculture and Rural Development : MARD）に派遣されている内藤さんと杉浦リーダー、瀬古専門家との協議に加わる。夕食は、ハイさん持ちで、黒澤さんと一緒に、ハノイ市内のレストラン Van Tue（ヴィエトナム語で「長生き」を意味する）でヴィエトナム料理をご馳走になる。広いレストランが客で一杯であった。

10月3日（木）

HAU では、午前中、黒澤さんと、終了時評価に向けた土地・水資源管理分野の成果報告書の作成に資するために、これまでの同分野長期及び短期専門家の技術協力活動を、100%に対する割合で評価する。昼食は、タインさん、黒澤さんの3人で、フォーボーを食べる。午後は、2時から資料に目を通した後、3時から40分程カメラを下げて HAU 構内を歩いて回る。しかし、目新しいものは何もなく、結局1枚も撮らず。夕食は、ハノイホテル近くの日本食レストラン New Sake で、焼き鯖定食と生ビール。合わせて92,000VN ドン。

10月4日（金）

アジアへ出るとテレビを見るのを常とするが、ここハノイホテルで、いろいろとチャンネルを回してみると、台湾を含めて中国語放送の局が多く、中国の進出、嫌いながらも中国との関係強化がうかがえる。確かに中国からの観光客も多い。ハノイホテルでもよく見かける。しかし、彼らの場を占有し、大声で話す傍若無人的な態度は、やや気になるところではある。HAU では、中央実験室で、チャに、バングラデシュの砒素汚染に関する日本語論文の図表を英語に訳しながら説明する。途中で、タインさんの、キュウリの養液砂耕栽培試験を温室まで見に行く。11時半から、タインさんと、いつものレストランにフォーを食べに行く。今日はフォーガー。HAU の昼休みは11時から13時までで、多くの教官は HAU 構内に家を持ち、昼食は食べに帰る。身近なところでは、タインさんとハイさんはハノイ市内に自宅を持ち、チャは HAU 構内に家がある。レストランからの帰り、風が吹き、空が曇り、スコールの兆し。しかし、昼休みに少し降っただけ。

午後2時からセミナー、「Grey Degraded Soils in Viet Nam」の表題で、場所は図書館の2階のセミナー室。土地・水資源管理学部の関係の教官と修士課程の学生が集まってくれた模様。私が話す前に、灰色退化土壌の、ハイさんが生成、ひとり（顔は知っているが名前は知らず）が物理性、タインさんが化学性について、勿論ヴィエトナム語で、出席者に全般的な説明をする。その後、ハイさんの九州大学でのカウンタートパート研修の成果と海江田明大の卒業論文（2001年度）での結果を基に、ヴィエトナム灰色退化土壌の物理性、鉱物性、化学性について、OHP シートを使って、やや詳細に説明する。私の話は、ハイさんが英語から越語に通訳する。説明の後、実験結果の論議に移り、問いかけて対話による議論の進行を期待したが、結局私の考えを述べたに留まる。その後、出席者からの質問に対して（質問は紙に書かれて提出された）、ややかみ合わないところもあったが、できるだけ実験結果に基づいて回答する。午後2時から4時までの予定が、4時半までかかる。夕食は、土地・水資源管理学部の主だった教官との会食に招待される。レストランは、2日前にもハイさんに連れて行かれた Van Tue で、出席者は Vong 学部長、カインさん、ハイさん、タインさんに黒澤さん。会話の中で、サバに、しかも汽車で行くことになり、話が弾み、大いに興奮した次第。サバはヴィエトナム北部山地の中心地で、1903年フランス植民地時代に、彼らの避暑地として開かれ、欧米

から多くの観光客が訪れる観光地でもある。

10月5日(土)

土曜日で休日。明け方雨が降ったらしく、道路が濡れていた。夜中またやや激しい雨。雨のハノイ、ハノイには雨がよく似合う。朝食時、JICA 派遣の統計の短期専門家で見えている村岡徳人さん(財団法人農林統計協会)と一緒に、2時間程話す。部屋に戻り、11時頃昼食のパンを近くの店に買いに出た他は、資料に目を通したり、英字新聞(Viet Nam News)を見たり、ベッドに横になったりで、完全休養に当てる。午後6時半村岡さんと落ち合い、ホテル近くの韓国レストランで焼肉を食す。済ませて近くを散策。食堂、喫茶店は、多くの人で賑わっていた。スーパーに入り、一回り見て回る。

10月6日(日)

昨夜はかなりの雨が降ったようで、朝食時、ハノイホテルの前に水が溜まっているのを見る。午前9時にホテルロビーで待ち合わせ、タインさんの案内で市内観光。元々は汽車に乗って近郊の街まで行きたいという希望を出していたのだが、それがバスでハテイ(Ha Tay)省に行く話に縮小し、今朝タインさんに来てもらった時には市内観光になる。外国人がハノイ市外に出るのは、観光地を除いてまだまだ難しいのかもしれない。市内観光といっても、大抵の所は既に回っているのだから、西湖(Ho Tay)周辺の神社仏閣を回ることになる。これらは名前には聞いて、その前を通ったことはこれまでもあるが、参拝したことはなかった。回った所は、鎮武観(Den Quan Thanh)、鎮国寺(Chua Tran Quoc)と西湖頭跡(Phu Tay Ho)。Den は temple と訳され、英雄を祀る、日本的に言えば神社あるいは祠であり、Chua は pagoda と訳され、仏教に関連して寺を意味する。Phu の訳語は聞かなかった。

ハノイホテル横のザンヴォー通り(Pho Giang Vo)のバス停から乗合バスで行くことにしたが、路線が違っていたらしく、結局乗合タクシーで鎮武観に行く。ここに参拝し、近くの鎮国寺(鎮国古寺)に回り、参拝。さらに西湖頭跡まで足を延ばすことにして、タインさんが近くの人に聞いたところ歩いて20分ということだったので、歩いて行こうとしたが、とても20分で行ける所ではなく、疲れたこともあり、途中でタクシーを拾って行く。タクシーを降りて西湖頭跡までの間、参道の片側に食堂と供物を売る店が並ぶ。ちょ

うど旧暦の9月1日に当たり、西湖頭跡は大勢の参拝客で賑わっていた。タインさんの話では、旧暦の1日と15日に参拝すること。人々は供物を備え、お礼替わりの偽のお札を燃やして一心に祈っている。ヴィエトナムの人の心、精神文化を見る思いであった。鎮国寺も人が多かったが、西湖頭跡の方がはるかに多かった。鎮国寺は半ば観光地化し、地元の人は西湖頭跡に参るであろうか。あるいは鎮国寺は中国の影響が強く、西湖頭跡はヴィエトナム古来の寺社のスタイルなのかもしれないとも思ってみる。

タクシーで西湖まで戻り、湖畔のレストラン Banh Tom Ho Tay で昼食。屋外や屋上にテーブルが並べられ、家族連れ、友達同士、仲間連れと、多くの人であった。ここでは、ヴィエトナムの人の食に対する思いを見る。1時間以上タインさんとふたり飲食し、周りの人を見て楽しむ。午後1時半頃ハノイホテルに帰る。さすがに歩き疲れ、飲食疲れで、午後はベッドで横になっていた。午後7時から、村岡さんと、ホテル近くの Pumpkin Café でヴィエトナム料理を食す。ビールを飲み、色々と食べて、ふたりで121,000VN ドンを払う。午後9時頃部屋に戻り、家に国際電話。電話事情もはるかに良くなった。お蔭で、絵葉書をまだ1枚も書いていない。

10月7日(月)

技術協力も2週目に入る。ここまで、金は使わず、食べ過ぎ、飲み過ぎであるが、体調は一応の状態にある。平日のいつもと同じく、6時過ぎに起きて、6時45分から朝食。バイキングスタイルで、主食は、今日はパン。体が野菜を欲しがっている。8時過ぎに、プロジェクトの車でホテルを出発。同乗は、杉浦リーダーと田浦悟さん(農学分野の短期専門家、鹿児島大学生命科学資源開発研究センター教授)。8時40分頃に HAU へ着いたと思う。HAU では、土地・水資源管理分野の技術協力活動の取り纏めをワープロに打ち、11日に予定している2回目のセミナーの準備に入る。

10時半頃から、中央実験室で、ハイさん、タインさん、カインさん、黒澤さんと、私の活動計画に係るフィールド調査について打ち合わせる。8日と9日に水質調査用の水試料採取;16日に灰色退化土壌の土壌調査と土壌試料採取。8日の水試料採取は、ハイさんが単独で実施し(学生は使うと思うが)、9日の水試料採取と16日の土壌調査と試料採取には、プロジェクトの車を出して、私と黒澤さんが同行する。サバ行きを、ハイさん、カインさん、黒澤さんとの同行で、18日の夜

にハノイを汽車で出発、車中泊し、19日と20日サバを見て、20日の夜行に乗り、21日早朝ハノイに着くように計画する。土日をふるに使っての強行軍。昼食は、ハイさん、黒澤さんに、田浦さんが加わる。常に、ヴィエトナム側カウンターパートが払ってくれる。今日は、ご飯とおかず。それにビール。帰りに、池の辺のカフェでコーヒーを飲む。午後1時頃から3時過ぎまで、専門家によるチームミーティング。Work Planを最終的に作成し、5時過ぎにHAUを出て、6時少し過ぎにハノイホテルに着く。夕食は、ひとりということもあり、10USドル食事クーポン券を使って、ホテル内の中華料理店で済ませたが、完全な失敗であった。シチューと思い込んで注文したら、運ばれてきたのは東坡肉（豚の角煮）。それが8切れも出てきては、4切れ片付けるので精一杯だった。

10月8日（火）

ハノイは穏やかな夜明け。平和な1日の始まりである。いつものように、8時過ぎにハノイホテルを出て、ホー・チ・ミン主席が1945年9月2日ヴィエトナム民主共和国の独立を宣言したバーディン広場（Quang Truong Ba Dinh）の南端を通り、ホー・チ・ミン廟（Lang Chu Tich Ho Chi Minh）を遠くに見て、復元されたハノイ城北門の横を通り、旧市街（Old Hanoi）の北端をかすめ、紅河にかかるチュオンズオン橋を渡り、ザーラム県に入る。ロータリーから左に曲がり、ハノイハイフォン（Hai Phong）道路を10分程走り、右に折れてHAU通用道路に入り、HAU本館前に8時40分頃到着する。プロジェクトサイトでは、専門家室と中央実験室を何度か往復して、専門家室では、土地・水資源管理分野の技術協力の取り纏めをワープロで打ち、中央実験室では、タインさん、チャと、11日のセミナーの進め方について話し合い、ハイさんと、灰色退化土壌の採取地、ゼオライト添加効果のポット試験の設定について打ち合わせる。夕食は、高須さん（九州大学大学院農学研究院助教授）を迎えて、杉浦リーダー、瀬古さん、田浦さんと、Emperorで会食。ヴィエトナム料理で確かにおいしかったが、値段もその分大いに高かった。

10月9日（水）

ハノイに来て10日目。時間だけが徒に過ぎていく。大学に着いて後、9時半出発で、水質調査用の水試料採取に行く。同行は、黒澤さん、ハイさんとカインさん。場所は、ハノイ省ザーラム県フードン社。HAU

から車で20分程。フードン社は、ズオン川（Song Duong）（ハノイ市のすぐ上流で紅河から分かれる）の堤防沿いに位置する。まず、フードン社の共産党委員会を訪ね、表敬する。儀礼的な挨拶を交わし、フードン社の農業（作物生産と家畜生産）の概要について、責任者（共産党委員会における地位は聞かず）から、ハイさんの通訳で話を聞く。その後、責任者自らの案内で、社内を見て回る。見て回りながら、土地利用や集落をスライドに撮る。今や世の中はデジタルカメラ全盛であるが、アジアへ出かける時は、私は今でもスライド（ポジフィルム）である。まず、堤防を越えて堤外に降り、堤外の土地利用を見る。堤外は雨季には冠水し、水の深さは2mと聞く。堤内に戻り、土地利用、水利施設を見て、1軒の農家に入り（農民の名はグエン・ヴァン・ディエプ（Nguyen Van Diep））、バイオガスの利用状況を視察する。フードン社でのバイオガスの利用は、豪州の援助機関の技術協力を得て、1999年に始まる。

これまで、堤外（outside dam）と堤内（inside dam）を逆に理解していた。正しくは、堤防の川側が堤外で、堤防の集落側が堤内。フードン社、堤外は6月～8月の3ヶ月間冠水するので、灌漑施設がなく、年2作の畑作物のみの栽培。堤外の河川敷には、この時期見渡す限りの玉蜀黍が栽培され、手前では甘藍がつくられていた。最も深い所では、雨季の残り水を利用して水稻が栽培される。堤外の一部は、堤防に沿って住居地になっていた。堤防の上に立って堤内を見ると、伝統的な赤瓦の平屋の農家群に、2階建て、3階建ての豪華な造りの農家が散見される。家に付された年号から、2000年以降に建てられたことを認める。

堤内は水利施設が整備され、年2作の水稻と冬作物の栽培。ちょうど、夏稲の刈り取りと冬作物の植え付け時期に当たっていた。フードン社の水利施設、灌漑用の水路と排水用の水路が分離される。しかし、灌漑施設と排水施設の分離は、紅河デルタでも限られた地域のみで見られ、多くの所では灌漑施設と排水施設が共用されているとのこと。フードン社でバイオガスを燃料としているのは200軒の農家で、その1軒、見学したNguyen Van Diep氏の家は、盆栽作りで収入を得て、他の農家に比べてはるかに立派な造りであった。乳牛（ホルスタイン）の排泄物を床下のタンクに溜め、タンク内で発生したメタンガスを台所まで引いて燃料とする。Diep氏の話では、メタン発酵を促進させるための微生物添加は行わず、メタンガスは近くの農家にも一部供給する。

結局、社内を見て回っただけで、水試料採取は、HAUのスタッフが担当してくれた。外国人は水試料採取に直接タッチできないのかと思い、夕食の時、ハイさんに聞いてみたが、そうではなく、我々が集めるのは大変だろうという配慮からとのこと。しかし、外国人に社内をうろろうされるのは嫌なのも事実だろう。配慮は有難いけれども、野外調査の成否はサンプリングにかかり、後日再サンプリングすることになる。社内見学の後、同じザーラム県内のイェンヴィエン町(Yen Vien township)まで車で走り、フードン社共産党委員会の議長(Chairman)と副議長(Vice-Chairman)を招待しての昼食。宴会は根が嫌いではないので、ビールを飲んで騒ぐ。8日と9日の水試料採取のために、ハイさんに前もって払った費用は300 USドルで、黒澤さんと折半する。我々はHAUへの研究支援として、むしろ手伝いのつもりであり、それに金を払うのはやや釈然としない思い。しかし、大半が対社工作費と聞いては致し方なし。午後1時半には大学へ戻ったが、昼のビールのやや飲み過ぎがたたなり、午後はほとんど仕事にならなかった。夕食は、ハイさんの驕りで、黒澤さんと3人山羊肉を食す。山羊肉だけを食わせるレストランで、広いレストランが大勢の人で遅くまで大いに賑わっていた。ハノイホテルに近く、帰りは歩いて帰る。

10月10日(木)

今日は30回目の結婚記念日である。いつものようにHAUへ出かけ、短期専門家としての活動。専門家室と中央実験室を往復し、土地・水資源管理分野技術協力の内容と評価に係る取り纏め作業のワープロ打ち、明日のセミナーの準備と、チャ、タインさんとの打ち合わせ。採取した農業用水の硝酸イオン濃度測定結果のチェックを行う。HAU本館の前では、明日の入学式の準備。夜は、JICAの農業関係長期専門家の会合に出る。場所はNew Sake。ハノイも秋の訪れ、朝夕は幾分涼しくなった。

10月11日(金)

寝汗が出て、頻脈がきて、2時から4時までベッドの上で苦悶し、寝られず。念のため、入口のドアのチェインロックを外す。体調悪し。胸が気になり、ゲップを繰り返してどうしようもなく、朝食も全く取る気になれず。加えて、いつもより30分早く出発する。車の中でも体を持て余し気味。HAUでは、新入生の入学式に出る。8時半開始と聞いていたが少し遅れ、大学

の首脳陣が出て来て、8時45分頃から始まる。場所は本館の前。そこに仮設の舞台が造られ、ホー・チ・ミン主席の胸像が置かれる。バックのカーテンに、Dai Hoc Nong Nghiep Mot nam 1956-2002(第1農業大学1956-2002年)の文字。仮設舞台の両脇に教官の席が設けられ、専門家を含む外国人ゲストは、副学長や学部長と並んで、前の方の席をあてがわれる。欧州系外国人は、我々日本人とは逆のサイドに座り、そこに音楽隊も並ぶ。仮設舞台の前の道路と芝生に、新入生が学部毎に座る。彼らが座る小さな椅子は、温泉の浴場の椅子を連想させる。最初に、Dang Vu Binh学長の挨拶。その後も入れ代り立ち代わり、挨拶が続く。続いて、学生の代表に記念状が贈られる。細かなことは、ヴィエトナム語のためわからず。式が終わって教官が退席して余興に移り、学生が舞台上がって歌っていた。

入学式の後、食品科学工学部(Faculty of Food Science and Technology)の開学式に連れて行かれる。農学部から一部の学科が独立して、新たに学部をつくる。学長らによるテープカットの後、アオザイ姿の女性教職員に囲まれて写真に収まり、建物内を見て回り、記念パーティに出る。11時過ぎから、土地・水資源管理学部の土壌学・農業化学科(Department of Soil Science and Agrochemistry)主催の歓迎昼食会に招かれる。会場は、構内のキムタイン(Kim Thanh)食堂。ご馳走を前に、体調不良でほとんど口にできなかったが、ビールとワインの100%乾杯、50%乾杯だけは繰り返す。

午後2時からセミナー。場所は、先週と同じく図書館の2階。しかし、出席者は先週よりも少なくとも20名程度。「Heavy Metal Accumulation and Behavior」の表題で、チャの学位論文の主要部分を、チャの通訳と説明で話し、「Clay Mineralogy」の表題で、タインさんのカウンターパート研修でのヴィエトナム沖積土壌の粘土鉱物分析結果を、タインさんの通訳と説明で話す。前回4日のセミナーで、対話を試みてやや空しい結果に終わったので、今回は、ふたりの業績の紹介に重きを置く。発表の後、15分程質疑応答。紙に書かれて提出された質問に、チャ、タインさんの3人で答える。午後4時で終了。5時にHAUを出て、ハノイホテルに着いたのは6時。夕刻のハノイ市内は交通渋滞で、1時間もかかってしまう。ハイさんに頼んで車を借りてもらい、7時にホテルを出て、ノイバイ空港まで勝子を迎えに行く。無事出会えて一安心。ハノイホテルに戻る。

10月12日（土）

一日ハロン湾（Vinh Ha Long）に遊ぶ。ハロン湾は去年に続いて2回目。海に石灰岩が林立し、石灰岩の間を縫ってクルージングする。ハイさんに車（運転手付き）と案内を頼み、朝8時にハノイホテルを出発。道路が良くなり、ハノイからも日帰りで十分に観光できる。それまではハイフォン経由の道しかなく、橋はベトナム戦争の北爆で壊され、行きと帰りに1日ずつ2泊3日の行程だったと聞く。ハノイーハイフォン道路を走り、ハイズン（Hai Dong）で左に折れる。左に折れてすぐに、外国人観光客専用のドライブイン兼土産物店に案内される。お茶を飲み、店内を見て回り、休憩を取る。昨年のハイズンでは、ハノイーハイフォン道路に沿った、ベトナム人相手と思われる開放的なドライブインで休憩、女店員との会話を楽しむ。私としては、こちらの方がはるかに趣を感じる。ハイズンまでの間、道路の両側の水田が潰され、工場用地の整地が進む。ハイズン、去年に比べて建物の建設が進み、街の造りが立派になっていく。

ハイズンを過ぎて、道路の両側に、夏稲の刈り入れと冬作物の植え付けを見る。水牛に引かせて耕起し、畑では土寄せ、また人糞尿と思われる施肥。土はさすがに赤褐色。働いているのは、どこでも、ノンをかぶり、パーバとクワン姿の女性。2人乗り、3人乗り、鶏や豚を積んだバイクを快調に追い越して行く。クエンニン（Quang Ninh）省に入り、ハロン湾に近づくと、陸側に砂岩のなだらかな丘陵、海側に石灰岩の切り立った岩が見えるようになる。11時15分頃ハロン市に到着し、すぐに船に乗る。船は3人乗りの貸切り。運転手は波止場で待つ。船の乗員は4人で、家族経営と思われる。やや小さな船であるが、快適なクルージングである。船の船先に座って心地良い風を受け、世界遺産の景色を楽しむ。波は穏やか、天気も絶好である。先ず、去年も行った鍾乳洞に行く。ハロン湾に林立する石灰岩は、中が空洞になっているものが多く、大きな石灰岩では鍾乳洞として、クルージングコースに組み込まれている。船を降りて見て回る。馬鹿でかい大きさの鍾乳洞で、天宮洞、頭木洞と呼ばれる。中国人観光客団体が、ガイドの説明を受けている。後でハイさんに聞いた話では、ハロン湾を訪れる観光客の7割は中国人とのこと。そのせいか、ハロン市のホテルとレストランには、中国語の案内が目立つ。

鍾乳洞を見て船に戻り、石灰岩の林立の中へと進む。ひとつの景色の先には、また新たな景色が展開する。その繰り返しである。どこを見ても飽くことがなく、

石灰岩の見せる造形の妙に感嘆する。ハロン湾の石灰岩にも、その形から犬とか猫の名前のついた奇岩がある。闘う2羽の雄鶏（fighting cocks）と名付けられた岩は、別の方向から見れば1匹の魚になる。我々も、ひとつの岩に亀岩と名付ける。途中で生簀付きの船に寄り、海老と蟹を買う。それが我々の昼食になる。ビールを飲み、真っ赤に茹で上がった海の幸を頬張る。海の幸の後には、ご飯と野菜のスープ。これがまた口に合う。最後はパパイアのデザート。ハイさんの話では、石灰岩の海が海岸から150km先まで続くとのこと。その中の最も風光明媚な所が観光クルージングコースとなり、多くの船が行き交う。2時間半程走って、コースを一周する形で引き返す。ビールの酔いで心地良く、また受ける風も頬に爽やか。午後の太陽を受けて煌く海面、遠ざかる景色を惜しむ。4時間、全てを忘れての、まさに満喫のクルージングであった。クルージング、戻るコースは去年と同じだったが、進むコースは去年とは違っていたように思う。今回は沈む夕陽を見ながらのクルージングをと、ハイさんと約束する。

15時20分船を降り、ハロン市を小さく一周する形で回り、帰途に着く。同じ道に戻る。農地で働く農民の数は来た時よりも少ない。少年が水牛に乗って行く。途中のホンゲイ（Hong Gai）は石炭（ホンゲイ炭）の産地。ハイさんが、「私の恋人は肌が綺麗。私の恋人はホンゲイに住んでいる。」と、肌の少し黒い女性をからかったという歌を紹介してくれる。ハイさん、元プロボクサーの輪島に似て、義に篤く、ユーモアを解する好人物である。またハイさんの話、「poor」と「rich」の区別は、「poor」は「not probably enough」と言う人で、「rich」は「never enough」と言う人。まさに同意（Dong y）である。ハイズンまでの間、所々で煉瓦が焼かれている。紅河デルタの沖積土壌はシルト質であり、焼成後の変形がほとんどないのであろう。ハイズンで、真っ赤な太陽が沈む。行きとは別の外国人観光客専用のドライブイン兼土産物店で休憩。夕暮れの薄暮の中を一路ハノイへ向けて走る。ザーラムのロータリーを左折すると、バイク、自動車の洪水の渦。その中を走り、18時50分にハノイホテルに帰り着く。ふたりに丁寧に丁重にお礼を述べて別れる。夕食は、近くのPumpkin Caféでベトナム料理を楽しむ。

10月13日（日）

ハノイの休日。今日は、Vong学部長とタインさんが案内してくれる。その前、朝食後、ハノイホテルの近くを40分程歩いて見て回る。初めてハノイを訪れる

者には、街のいつもの生活も驚きと感動の連続である。9時半にふたりをホテルに出迎え、先ず、ホー・チ・ミン博物館 (Bao Tang Ho Chi Minh) に行く。日曜日ということで、ベトナム人の他、欧米人、中国人、日本人で賑わっていた。見学し終わって、すぐそばの一寸寺 (Chua Mot Cot) に参る。一寸寺のことは知っていたが、参拝したのはこれが初めて。千手観音が本尊。一寸寺は、説明によれば、ベトナム最初の長期政権で、仏教を保護した李朝 (1010~1225) 時代に建てられた寺の一つ。現在見るのは1955年に再建されたもの。ホー・チ・ミン廟は修理中で、残念ながら休館であった。代わりに、その前を過ぎて、ホー・チ・ミン主席の旧居に行く。高床式の質素な住まい。レプリカであるが、ホー・チ・ミン主席の人となり想をさせる。ホー・チ・ミン廟はこれまで2回行っているけれども、旧居を訪れたのはこれが初めて。移動は全てタクシーで、次に文廟 (Van Mieu) に行く。文廟は、一寸寺と同じく李朝時代の11世紀半ば創建の孔子廟で、ベトナム最初の大学と言われる。文廟は、ハノイに来る度に、相手変わって出かけている。奎文閣に科挙の合格者の碑を見て、本堂の孔子像に参る。旧市街に回り、還剣湖 (Ho Hoan Kiem) の畔に建つ玉山祠 (Den Ngoc Son) に参拝する。玉山祠は久し振り。還剣湖畔の Thuy Ta レストランで、湖を眺めながらの豪華な昼食。フエ (Hue) の阮王朝 (Nguyen Dynasty) の王族の気分である。かなりの費用だったと思うが、結局払ってもら。申し訳ないの一言であるが、このような場合のベトナム人の態度は頑ななまでである。

昼食後、ハンガイ通り (Pho Hang Gai) を歩いて絹のスカーフを土産に買う。ここで Vong 学部長と別れ、3人で、ハンダオ通り (Pho Hang Dao)、ハンズオン通り (Pho Hang Duong) と歩く。通り毎に売っている品物のメインが異なることに気付く。歩いて、ドンファン市場 (Cho Dong Xuan) に至る。市場内、人々の熱気とバイタリティに圧倒される。ドンファン市場からハノイホテルに帰り、少し休んで、16時45分にタインさんと待ち合わせ、還剣湖そばのタンロン劇場に水上人形劇 (water puppet) を見に行く。観劇料はひとり40,000VN ドンで、全てタインさん持ち。17時15分に幕が開き、口上と民族楽器演奏に続いて人形劇が始まる。全17話のそれぞれにストーリーがあり、言葉はわからなくても理解でき、動きがあって飽きさせず、正味約50分を充分に楽しんだ。水上人形劇は伝説や民話を題材にしたもので、紅河デルタの

農村で、節目毎のあるいは農閑期の娯楽として楽しまれてきた。18時10分に終わり、ハノイホテルに帰る。荷物を置いて、夕食に外に出たが、結局通りを歩き回っただけでホテルに戻り、ホテル内の中華料理軽食堂で麺を食す。やや佳しい夕食となったが腹には充分。

10月14日 (月)

今日は、朝8時過ぎの車で、大学 (HAU) に行く。大学に着いてすぐバッチャン (Bat Trang) 観光。バッチャンは焼物の村であり、紅河の堤防に沿い、HAU から車で10分程の所にある。バッチャンには、チャの案内で、3人で行く。バッチャンは、去年 (2001年) の6月と9月に次いで3回目であるが、行く度に新しい店が増え、街域が広がっているように感じる。11時頃まで、通りを歩き、幾つかの店に入って陶器を見て回り、その幾つかで購入する。バッチャンを見ての後、チャの自宅に、昼食に招待される。チャの家は HAU 構内にあり、昼食には、我々の他、Vong 学部長、グエン・ディン・マインさん (Nguyen Dinh Manh; 土地・水資源管理学部の前副学部長)、ハイさん、タインさん、黒澤さんも招かれていた。ビールを飲み、ウイスキーを飲み、乾杯を繰り返し、ブンチャ (Bun Cua; 漬け麺の一種) を食して、大いに飲食歓談する。午後1時半頃までチャの家に居て、その前チン・クエン・フイ (Trinh Quang Huy; その時、大学院生物資源環境科学府国際開発研究特別コース博士後期課程2年生) の両親の家に少し招かれ (チャの家のすぐ近くにある)、大学に戻る。しかし、飲み過ぎで、ワープロを打ってはみたが全く仕事にならず、30分程 HAU 構内を案内する。午後5時過ぎに出て、オペラハウス (フランス植民地時代の1901年に竣工される) 近くの Club Opera で、杉浦リーダー、瀬古専門家に、ベトナム料理をご馳走になる。田浦さんも同席。午後8時過ぎにホテルに戻る。歓待され過ぎの飲み過ぎ食べ過ぎで、体調やや悪し。

10月15日 (火)

朝8時50分にハノイホテルを出て、勝子をノイバイ空港まで見送る。出国審査を無事済ませたのを見届けて空港を後にする。ドンアン (Dong Anh) 県を通って HAU に行き、10時40分頃には到着する。空港ーハノイ市間の高速道路ができ、1984年にタンロン橋が完成するまでは、ドンアン県を通る道が、ノイバイ空港とハノイ市を結ぶ道ではなかったろうか。いつか聞い

てみたいと思っている。HAUでの仕事は、土地・水資源管理分野の技術協力活動の取り纏め作業。ひたすらワープロに向かう。11時40分過ぎから昼食。今日は、ハイさんと黒澤さんの3人。タインさんと一緒に時はフォーで、ハイさんとの時はご飯。しかし、いずれの場合も彼らが払ってくれる。ハイさんとの食事では必ずビール。この場合、昼、夜とビールを飲むことになる。飲待されるのはうれしい限りであるが、我が儘ながら身が持たない。午後も取り纏め作業。午後5時に出て、6時過ぎにハノイホテルに到着。ひとりの部屋に入るのは佳しいものである。夕食もひとり。食事クーポンを使って、ホテル内の中華レストランで済ます。このレストラン、ハノイ市内では指折りの中華料理店と聞かすが、それほどうまいとは思わない。多分、いつもひとりだからであろう。8時半過ぎに電話して、無事帰国しているのを確かめる。勝子が帰り、ハノイ滞在も半分を切る。

10月16日(水)

日常に戻って、8時過ぎにハノイホテルを出て、8時40分頃HAUに着く。今日の仕事は、ハノイ省ソクソン県での灰色退化土壌の断面調査と、ポット試験のための土壌試料採取。少し取り纏めのワープロを打って、9時半頃HAUを出る。同行は、ハイさん、カオ・ヴィエト・ハーさん(Cao Viet Ha; 土地・水資源管理学部講師)、グエン・テ・フンさん(Nguyen The Hung; 所属は農学部、「ハノイ農業大学強化計画」のカウンターパート研修で、ハイさんと同時期に、熱帯農学研究センターに3ヶ月間在籍)と黒澤さん。ザラムのロータリーを右に折れて、ハノイーランソン(Lang Son)道路に入る。ズオン川を渡ってすぐ左に曲がり、イェンヴィエン町からドンアン県を通り、ハノイーノイバイ空港道路を横切り、更に少し走って、10時45分頃目的地に着く。目的地は、ソクソン県タインスアン社のタインスオン農業協同組合(Thanh Thuong Agricultural Cooperative)。タインスアン社には3つの農業協同組合があり、その一つがタインスオン農業協同組合。

タインスオン農業協同組合の事務所を訪ね、タインスアン社とタインスオン農業協同組合の主要メンバーを表敬する。ヴィエトナムでは、外で仕事をしようとすると、その行政区に仁義を切るしきりがあり、それが依然として残っているのは、やや辛いところである。相手側は5人だったように思う。5人の地位と氏名は紹介されたと思うが、紙に書いてもらわない限

り、一度聞いたぐらいでは絶対に理解できない。社の責任者と私が、お互いに、ハイさんの通訳で挨拶を交わし、責任者から、この地域の農業概況について説明を受ける。しかし、責任者が誰かわからず、そのため、説明がタインスアン社全体なのか、タインスオン農業協同組合だけについてなのかは不明。以下は、時々質問を交えながら聞いた、社の責任者の話。

1970年以前は灌漑施設(irrigation system)が不備で、畑作物(upland crop)が年2作栽培されていた。主要な畑作物は馬鈴薯であった。水稻の栽培はなく、栽培できた場合でも収量は低く、2.5トン/ha/作であった。1970年以降灌漑施設の整備が進み、1978年にBig pumping stationが建設されて、1980年頃には100%の耕地が灌漑されるようになる。現在、耕作地の80%では水稻(春稲)－水稻(夏稲)－冬作物(winter crop)(年3作)の、残り20%では水稻－水稻あるいは畑作物の作付け体系。水稻収量は、高い場合で5トン/ha/作で、平均で4.4～4.6トン/ha/作。有機質肥料(organic manure, not compost)の施用量は80トン/ha/作。尿素の施肥量は、水稻で236kg/ha/作。灌漑施設と排水施設の分離はなし。灰色退化土壌の低位生産性を反映して、多量の有機質肥料と化学肥料が施用される。

説明を聞いて農地に入り、あちこち回って圃場を決め、断面観察用の穴を掘る。同じ圃場で、作土層をポット試験用に採取する。穴を掘るのは農民に頼む。後で聞いた話では、この圃場は水稻収量が2.5トン/ha/年と低く(年2作にしては低過ぎ、作の聞き違いかあるいは年1作の栽培か)、そのため2000年以降水稻の作付けを行わず、畑作物のみを栽培する。私はいつも見ているだけで、彼らがあちこち回って圃場を探している間、また穴が掘られている間、地形、作物、灌漑施設、有機質肥料等をスライドに収める。我々とは別に、黒澤さんは、地下水(井戸水)と農業用水(灌漑水路水)を、水質分析用にミネラルウォーターの空きボトルに採取する。穴が掘られて後、土壌断面をスライドに撮り、層位に分けて、Haさんが分析用に断面試料を採る。穴に入り、断面を見ながら、灰色退化土壌の生成について、HAU側メンバーとの協議を試みたが、議論の深まりはなく、断面を記載することもなく、すぐに埋め戻す。早々に切り上げ、社訪問の常として、タインスアン社とタインスオン農業協同組合の主要メンバーを招待しての昼食。表敬に始まり昼食に終わる。これが、ヴィエトナム/ハノイでのフィールド調査のしきり。このことに不合理さを覚えながら

も、己の人間性の軽さ故の悲しさ、また飲んで食べて騒ぐ。午後2時45分頃帰途に着き、4時HAUに着く。5時に出て、6時ホテル着。夕食は、ハノイホテル内の中華料理軽食堂で済ます。尚、後でハイさんに確認した話では、タインスオン農業協同組合事務所で説明してくれた責任者はタインスオン社の Vice-Head。従って、農業概況の説明はタインスオン社全体の話。

10月17日(木)

ハノイは良い天気が続く。10月5日の夜に降って以来一滴の雨もない。先週よりむしろ今週の方が気温は高く、外を歩くとすぐに汗が出る。朝8時にホテルを出て、8時40分にHAU到着。ザーラムのロータリーの所では、毎朝、フランスパン売りの女性が一定の間隔を置いて並ぶ。見慣れた光景になったが、車を停めてパンを買ったことは、これまでも今回も一度もない。HAUでは、2度ほど中央実験室に顔を出した他は、専門家室で、技術協力活動取り纏めのワープロに向かう。昼食は、田浦さんとフォーガーを食す。夜は、ハノイ市内のホテルのタイ料理レストランで、宇佐美さん(山口大学農学部教授、経済・農村開発分野の短期専門家)の歓迎会と田浦さんの送別会。

10月18日(金)

チュオンズオン橋を渡る時、今回の訪問で初めて紅河を撮る。水位が下がり、中洲では玉蜀黍が栽培されている。雨季には中洲が水没する程で、雨季と乾季の水位差は数mに達する。東南アジアの大河ならではの光景である。HAUでは、10時から1時間程、マインさんと、講義室と中央実験室の入る建物の3階にある彼の部屋で、チャと3人、ハノイの地下水のヒ素濃度測定結果について議論する。測定値を落とした地図では、所々スポット状にヒ素濃度の高い所があり、世界保健機関(WHO)の飲料水基準 0.01mg/L を超えている。ヒ素汚染の要因として、畑作物への化学肥料の集約的施用と工場・産業施設からの排出を考えてみる。11時半から、マインさん、黒澤さんの3人で昼食を取りに行く。場所は、HAU構内のキムタイン食堂。ここは、いつ行っても、HAUの教官、学生で賑わっている。午後3時前から30分程、土地・水資源管理学部の中央実験室の管理運営体制について、同室の管理責任者であるタインさんに聞く。タインさん、3時半から授業があるということで中断。

午後5時にHAUを出て、グリーンパーク(Green Park)ホテルで降り、6時45分にハイさんと待ち合

わせて、ハノイで最も古いレストラン(創業40~45年)の一つで夕食。済ませてハノイ駅(Ga Ha Noi)へ行く。待合室で待って、ラオカイ行きの急行寝台列車に乗り込む。同行は、ハイさん、カインさん、黒澤さん、カインさんと同じ学科の2人で、総勢6人。寝台車は4人一部屋。二段ベッドが両側に並ぶ。サパ行きの成功を祈って、ハノイビールで乾杯する。定刻の午後9時30分寝台列車はゆっくりとハノイ駅を発車、ラオカイまで約300kmの汽車の旅。旧市街の端を通り、ロンビエン橋(Cau Long Bien; フランス植民地時代の1902年の建設)を渡る。念願の汽車に乗ったのも初めてなら、ロンビエン橋を渡ったのも初めて。下流側にチュオンズオン橋を見る。橋を過ぎてゆっくりとしたスピード。日本の列車に慣れた身には、揺れが激しく感じられる。その揺れの中、下段のベッドで次第に眠りにつく。

10月19日(土)

定刻より30分早く、列車は5時30分にラオカイ駅に到着。着いたことの何の放送案内もなく、人のざわめきで気付き、あわてて身支度をする。駅に降り立った客は外国人がほとんど。5時45分頃空が白々と明け始める。駅前からバスに乗り、6時サパに向けて出発する。バスは満席。ラオカイの街は動き始めている。すぐに紅河にかかる、最近できたと思われる立派な橋を渡る。小さな市が立っている。川沿いの道を走り、バスは次第に登り始める。川が段々と下になっていく。籠を担ぎ市場へ急ぐ女性、学校へ向かう子供達。土地利用は、山間低地の水田が主。切り通しの崖、土は赤くて(赤褐色~黄褐色)深い。母岩は石灰岩と見る。道は次第に急になる。下界はまさに一幅の風景画。山腹に棚田が見え始める。段数は様々ながら、そこかしこに見える。道は所々工事中。揺れがひどい。サパ行きのバスが、曲がりくねった道を連なって登って行く。揺れが増してくる。途中から小雨。回りの景色に気を取られているうちに、7時20分頃バスはサパの街に到着する。幾つかのホテルで乗客が降り、我々は最後に降りる。標高1,650m、ラオカイとの高低差1,200mを1時間20分で登る。サパの街、ラオスの古都ルアンパバーン(Luang Prabang)に似るという印象。行政的には、ラオカイ省サパ県に位置する。泊まりはホアンリエン(Hoang Lien)ホテル。建てられたばかりのようである。部屋はバス・トイレ付き、シングルとダブルのベッド、テレビ、机と椅子、サイドテーブルと椅子2脚、収納箱、洋服ダンスセットと壁掛け扇

風機。しかし、冷蔵庫は見当たらない。

部屋に荷物を置き、外に出る。ホテル前の道を下り、レストランに入って麺の朝食。朝食後、乗合タクシーでシルバー滝 (Silver Falls) を見に行く。シルバー滝標高1,800m、山道を登って行く。シルバー滝までサバの街から12kmと聞く。滝への行き帰り、北部山岳地帯を代表する地形・土地利用を楽しみ、少数民族の住居の棲み分けを見て、写真に撮る。シルバー滝では、滝を登って見物し、橋のそばに並ぶ屋台の1軒に入り一休み。焼酎を飲み、女性が炭火で焼く猪肉、竹飯 (モチ米)、サツマイモ、卵を食す。滝からサバの街へ戻るタクシーの中で、サバ県の土地利用についてハイさんらに聞く。サバの街に戻り、ドラゴンパーク (Dragon park) へ行く。ドラゴンパークは、サバの街を見下ろす小高い丘になっている。公園は石灰岩から成り、奥まった所に、公園の名前の由来となっている龍の形をした岩と、長恵次九州大学名誉教授 (「ハノイ農業大学強化計画」の前チームリーダー) の寄贈された桜の苗木を見る。対面の山の中腹には、少数民族の住居と棚田が見える。公園内の休憩所で、ヴェトナム茶 (緑茶) を吸いながら、カインさんらに北部山岳地帯の焼畑の現状について聞く。昼食は、ドラゴンパーク内のレストランで、豚肉と兎肉のバーベキュー。

ホアンリエンホテルに戻り、しばらく休憩を取る。午後3時ハイさんとカインさんの部屋に向向き、彼らと、黒澤さんも同席して、今後の研究協力について打ち合わせる。午後4時から、6人で、ホテルから数分のサバ県人民委員会 (Sa Pa District Committee) を訪問し、協議する。県の人民委員会側は、人民委員会議長 (県のNo.2) を含め3人。県のNo.2自ら出てくるとは、サバ県の農業開発におけるハノイ農業大学教官の高い貢献と、そのことに因る我々の訪問に対する県側の厚遇を想わせる。先ず、人民委員会議長が、サバ県の農業・立地環境について概況を説明する。続いて、我々の側が、各人それぞれに、訪問の目的とサバ県で実施している試験研究・調査活動について話し、質疑応答に移る。私と黒澤さんが加わる場合は、ハイさんの通訳となるが、それ以外は当然ながらヴェトナム語での協議となる。午後5時50分まで、停電のため途中から蠟燭が灯され、友好的な中にも幻想的な雰囲気での話し合いとなった。午後6時から、ホアンリエンホテル内のレストランで、共産党リーダー (県のNo.1) も出席しての、人民委員会主催の歓迎夕食会。蠟燭の明かりの中で始まり、途中から電気がくる。7時40分まで、乾杯を繰り返しながら、夕食会は和やか

に続いた。終わって8時、4人でサバの街に出る。尚、ヴェトナム北部山岳地帯の立地環境と農業概況については、サバ県人民委員会での協議を通して得た知識を含め、現地踏査や収集した情報を基に、黒澤・江頭 (2003) に記述する。

10月20日 (日)

朝6時頃目が醒め、7時頃起床、8時頃からホテルの近くを散策する。今日も朝から停電である。ものを書くのには不自由しないが、テレビが見られない。9時前から、ハイさん、黒澤さんの3人で、昨日と同じレストランに朝食を取りに行く。カインさんら3人は、カインさんのプロジェクトに係る仕事で、サバの街から離れた社に既に出立していた。今日の朝食は、フランスパンと目玉焼き2つ。目玉焼きをパンに挟んで食べる。朝食の時、ハイさんに、昨日の人民委員会での協議内容の細部について確認する。朝食後、サバマーケット (Cho Sa Pa) に行く。市場に行くのは、アジア訪問の楽しみのひとつである。サバマーケットはホアンリエンホテルのすぐそばにあり、日曜日で賑わっていた。サバ県には6少数民族が居住するが、サバマーケットはほぼフモン (H'mong) 族一色であった。フモン族は、黒のロング服に、黒の脚半を巻いている。フモン族の中に、赤い上着と赤頭巾のザオ (Dzao) 族が混じる。ザオ族の成人は、女性でも頭を剃りあげている。他に2人、別の民族を見る。マーケットでは、キャッサバ、タロ、スス (Su su; 日本名ハヤトウリ) を始め、多種多様の野菜 (葉菜類、果菜類、根菜類)、果物 (林檎、柿、栗、柑橘など) が、並べられあるいは積まれて売られていた。途中でハイさん、黒澤さんとはぐれ、ひとりで見て回りながら、それらを写真に撮る。市場の奥は、台と椅子が並べられて簡易食堂になっており、フモン族の人々が食事をしていた。

2人と出合い、市場を出て、少数民族の刺繍入りバッグを土産に買い、サバの街を道なりに下って行く。時々立ち止まっては景色を眺め、写真に写す。途中でゲートがあり、先へ進むには、外国人は1人当たり2,000VN ドンの支払いを求められる。恐らくは、そこを過ぎては少数民族の居留地なのであろう。2,000VN ドンを払い、更にバイクで行くことにして、ハイさんが戻って、運転手付きバイクを2台借りてくる。1台の後ろには私、もう1台の後ろにはハイさんと黒澤さんが乗り、途中から砂利混じりになった未舗装の道を下って行く。欧米人の若いグループやカップルは、少数民

族のガイドを案内に、歩いて下って行く。ガイドの若い女性は、見事な英語を話していた。高齢者はバスで回る。

ハイさんから、少数民族の集落（Ban；英語では hamlet）を見学できると聞き、密かな期待を抱いていたが、意志の疎通を欠いていたようで、黒澤さんが、農民（少数民族）にインタビューしたいとの希望を出したが駄目で、農家に近づくことすら聞き入れてもらえなかった。結局、下りながら所々でバイクを降りて、地形、棚田、住居を遠くから眺め、写真に撮っただけであった。それにしても、すばらしい眺めであった。しかし、外国人には桃花源に思えるこの景色も、そこに住む人々にはただただ厳しい生活であろうし、共産党や人民委員会のリーダー、彼らの活動を科学的に支える HAU 教官の仕事にも厳しいものがあることは容易に想像された。現地踏査の最後に、手作りの小物を売りに来たフモン族の女の子数人を、ハイさんに頼んで並べさせ、カメラに収める。皆体つきこそ小さいが、10歳はとうに超えているだろう。そこから引き返してサバの街に戻り、バイクの運転手に、日本人 1 人当たり 50,000VN ドンを払う。

ホテルに戻り休息。12時半に待ち合わせ、ちょうど帰ってきたカインさんら 3 人も一緒に、昼食を取りに出る。昼食に初めて豆腐を食す。残りは大体いつもと同じで、茹でたススに野菜と肉の炒め物、卵焼き、ご飯にスープ。食事の前に勿論ビールで乾杯。昼食の席で、昨日の人民委員会での、チュン（Trung）さんとティエプ（Tiep）さんの話の内容を聞く。2 人ともカインさんの下で働いている。Trungさんは、サバ県で在来稲品種（traditional rice varieties）を集めており、ひとつの社で 20 品種を既に集め、県全体では 30 品種を超すであろうとのこと；Tiepさんは、水田での深層施肥の稲の生育・収量への効果を調べており、現在の 1 か所での試験をもっと多くの場所で行いたいと提案したことを知る。食事時は、その地域の食料事情、作物生産概況を知るだけでなく、絶好のコミュニケーションの場となる。

昼食を終えて、ホテルへ戻る 4 人と別れ、黒澤さんとふたり昼のサバマーケットを見に行く。朝に比べ、さすがに人は少ないようである。見て回りながら写真に撮る。色々な野菜が売られている。形の良い果物は中国からの輸入品であろう。フモン族の女性が、小粒の貧相な林檎を、売り手のキン族（Kinh；ヴィエトナム人を構成する主要民族で、全国民の八割を占める）の女性と交渉しながら買っている。ガックは初めて見

たが、カラスウリを大きくしたようで、黒澤さんの話では、中が赤く、食品の赤の着色に使われるとのこと。足が付いたままの豚肉の塊も、台上に並べて売られている。朝に見た蚕の蛹は、人気が高いのか、もう売り切れていた。マーケットの 2 階の作業場では、フモン族とザオ族の女性が刺繍をしており、彼女らの手作業にしばし見入っていた。

ホアンリエンホテルに戻り、荷物を纏め、チェックアウトする。ホテルへの支払い、我々ふたりは、1 人当たり 540,000VN ドン。日本円で 4,700 円。電気はこず、貧弱な設備と無愛想なサービスの割には高いような気がする。16 時 4 分マイクロバスでホテルを出発する。サバの街から三々五々歩いて帰るフモン族の若い娘さん達を次々と追いついて行く。道路工事が各所で行われ、車が通る度に土埃が凄じい。来年（2003 年）に、サバが開かれて 100 周年の記念祭があるとかで、それに向けての道路工事を急いでいるのであろう。途中 2 個所で車を停め、夕刻迫る棚田を写真に撮る。17 時 25 分ラオカイ駅に到着、マイクロバスを降りる。駅前のレストランで夕食。ラオカイまで下ると、急に暑さを感じる。ラオカイは国境の街。山の向こうは中国の雲南省である。夕食後、列車の発車まで時間があつたので、青空屋台でお茶を楽しむ。辺りは十分に暗く、店に灯火は無く、その暗がりの中、店のお嬢さん方としばしの安らぎを交換。

駅の待合室で少し待って、ハノイ行きの急行寝台列車に乗り込む。夜の待合室は、人の心をもの悲しくさせる。特に国境の街であれば尚更である。列車は、行きと同じ二段ベッドの 4 人個室。ハノイーラオカイ間の急行寝台（二段ベッド）、片道の運賃は 1 人 200,000 VN ドン（日本円で約 1,700 円）。定刻 20 時 20 分より 13 分遅れ、20 時 33 分急行列車はラオカイ駅をゆっくりと離れる。しばらくビールを飲んで歓談した後、21 時 30 分頃には別れてベッドに横になる。室内灯を消すと、窓外が、暗がりの中に、影絵のようにかすかに見える。長い間、列車は紅河に沿って走っていた。

10月21日（月）

午前 4 時過ぎ、列車はズオン川にかかる鉄橋を渡る。外は雨になっていた。4 時 40 分ロンビエン橋を渡り切る。ロンビエン駅の下の市場は、早起きの人で賑わっていた。皆合羽を着けている。4 時 48 分ハノイ駅に到着。風雨が激しく、しばらく列車の中で待つことにしたが、一向に収まる気配はなく、車内で配られた一回着捨てのレインコートを被り、長いプラットフォーム

ムを駅舎まで歩く。余りに雨が激しく、バスで行くのを諦め、タクシーでHAUに行く。6時頃到着。鍵を開けてもらうのを待ち、土地・水資源管理学部の中実実験室で、椅子に座って7時半頃まで仮眠する。8時過ぎには専門家室に移り、短期専門家業務として、土地・水資源管理分野の技術協力活動内容の取り纏めをワープロで打つ。11時頃に中央実験室に行き、タインさん、黒澤さんの3人で、キムタイン食堂に昼食を取りに行く。昼食から戻り、中央実験室の管理運営、機材の維持管理と修理、試薬の調達、廃液処理等について、10月18日に続いて、タインさんにインタビューする。午後2時から、土地・水資源管理学部の主要メンバーとの、今後の共同研究と来年（2003年）11月に予定している合同ワークショップについての協議に、黒澤さんと臨む。一応の合意に達し、明日サインを交わすことになる。中央実験室に戻り、タインさんに、分析データの記載法について技術指導する。午後5時にHAUを出て、ハノイホテルに再度のチェックイン。部屋は1416号室。14階相当で、この高さになると、西湖（Ho Tay）が眼下に見えるようになる。ツインベッドで、他の調度品・設備は718号室に同じ。1泊の宿泊費（朝食込み）も同じ45USドル。ただ、再チェックインということで、他のJICA特典は削られる。村岡さんと韓国料理を食べに行き、戻って荷物の整理と洗濯。

10月22日（火）

昨日の朝の激しい雨は、ハノイの季節が変わりつつあることを示しているようである。ハノイは、今日も雨模様の朝。いつものように8時過ぎにハノイホテルを出る。HAUでは、土地・水資源管理分野の技術協力活動の取り纏め作業。11時過ぎに中央実験室に行き、タインさんの測定結果の記載の仕方を修正する。各種野菜の硝酸イオン濃度の測定結果で、供与機材を用いた測定事例として、取り纏め報告書に添付することにする。しかし、タインさんは授業で忙しく、ベルギーのGent Universityで修士の学位を取って帰国したばかりの若いチャン・ティ・レ・ハ（Tran Thi Le Ha）さんに頼んで修正。打ち出してもらう。昼食は、タインさん、黒澤さんと一緒に、フォーを食しに行く。午後、技術協力活動取り纏め報告書を打ち上げ、フロッピーディスクと共に杉浦リーダーに提出する。引き続き、Short Reportと専門家業務完了報告書の作成に取りかかる。夕食は、黒澤さんと共に、Dang Vu Binh 学長とファム・ゴック・トゥイ（Pham

Ngoc Thuy）大学院学部長（土地・水資源管理学部の前学部長）に招待される。

10月23日（水）

ハノイは乾季に入ったようである。今週に入ってからよりとした重い曇り空が続く。昨夕のPham Ngoc Thuy 大学院学部長の話では、HAUの修士課程の学生は約400人で、その内200人程が農学部、博士（Ph.D.）課程の学生は150人程。留学生はカンボディア、ラオスの他、中国からも。今日の仕事は、水試料採取に同行し、農村と農家を見て回る。目的地はフーラム社とフードン社。案内は、土地・水資源管理学部のホア（?）・ハイ・ハ（Hoa (?) Hai Ha）君。9時20分頃HAUを出る。プロジェクトの車を借り、運転手はツォン（Tuong）君。

ハノイーハイフォン道路をハノイの方へ戻り、途中から右に折れ、すぐにズオン川にかかる橋を渡る。ズオン川、堤外には玉蜀黍、堤内には水稻を見る。1時間程走り、10時20分頃フーラム社に着く。フーラム社、行政的にはバクニン省ティエンドゥ県に属する。先ず、フーラム社の共産党委員会に行く。フーラム社では、HAUスタッフのみでだが、10月8日に一度水試料を採取しており、今日が2度目の水試料採取ということで、社のリーダーや関係者への挨拶は必要なく、またハイさんやカインさんクラスの教官の同行の必要もなく、このことは、我々にとって時間的にも精神的にも非常に助かった。そのため、Ha君だけが共産党委員会の建物に入り、ひとりの案内者を伴って出てくる。その案内者があちこちと農家を回ってくれ、約2時間をかけて、6軒の農家から井戸水（地下水）を採水することができた。更に、農業用水を6個所で採水した。採水は黒澤さんとHa君に任せ、私は専ら農家の人の相手をしていた。行く先々の農家でお茶をご馳走になり、ヴィエトナム茶は好きで、おいしくいただいたが、それも続くと、やや閉口気味になる。水田では夏稲の刈り取り、道路では刈り取った稲の脱穀が行われていた。水試料採取状況、水利施設に加え、稲刈り、農家、池、村落内を写真に撮る。

12時をやや過ぎて、予定の採水を終わる。案内してくれた人と共産党委員会の建物の前で別れ、ハノイーランソン間の汽車の線路を渡ったところのレストランに入り、4人で昼食。場所はまだフーラム社。昼食のメインは山羊鍋。別のテーブルでは、同じ職場と思われる一団が、ビールをケースごと運ばせて飲み上げていた。午後2時前にフードン社に着く。フードン社は、

10月9日に一度訪れた所。何はさておき共産党委員会へ行く。しかし、フーラム社と同じで、社のリーダーや関係者への表敬は必要なく、お茶をご馳走になっただけで、案内してくれる女性を同乗させて、早速に水試料採取に行くことができた。午後4時半頃までかかって堤内を回り、農家6軒から井戸水（地下水）を採水し、6個所で農業用水（灌漑・排水）を採水した。昼食のビールが効いたのか、途中からは採水について回らず、車の中で休み、しきりに堤防の写真を撮っていた。フーラム社、フードン社とも、6軒の農家の選択理由は不明。しかし、社内の相互にやや離れた農家からの採水は好都合であった。案内してくれた女性と別れ、4時50分頃 HAU に帰り着く。大学の門の前で Ha 君と別れる。ハノイホテルに戻り、夕食は、宇佐美さんと、杉浦リーダーに招かれ、ご馳走になる。採水試料の化学分析は、pH は、黒澤さんが pH メータで測り、硝酸とアンモニウムイオン濃度は、HAU 側カウンターパートの仕事として、専らチャが分光光度計で測定する。場所は中央実験室で、測定機器はいずれも供与機材として持ち込まれたものである。尚、測定結果は、「紅河デルタ農村における水質調査の方法と実際」という表題で公表している（黒澤・江頭、2003）。

10月24日（木）

ハノイは今日も重い曇り空である。バイクで、自転車、歩いて街を行く人も、寒そうに厚着をしている。いつものように HAU へ出かけ、短期専門家としての業務。HAU へ行くのも、今日を入れて残り2日である。4週間、過ぎてみればあっという間のできごとである。専門家室と中央実験室の往復を繰り返しながら、専門家室では Short Report と専門家業務完了報告書を作成する。明日 JICA ヴィエトナム事務所へ行く必要がないことが分かり、やや拍子が抜けて、専門家業務完了報告書は、少し残して終わらず、中央実験室では、タンズェン社で採取した灰色退化土壌の物理的及び化学的性質について、ハイさん、Cao Viet Ha さんと、HAU 構内で採取した表面水の水質について、Tran Thi Le Ha さんと議論する。それにしても HAU の教官、講義が多過ぎるように思う。議論がしばしば中断され、尻切れトンボで終わり、満たされない気持ばかりが残る。昼食は、ハイさん、黒澤さんと、キムタイン食堂で取る。ハノイホテルの土産物店で、絹のスカーフ3枚を137,000VN ドンで購入する。

10月25日（金）

ハノイホテルでの朝食も今日が最後である。明日の早朝に出立する。今日を入れて23回、パパイヤ、スイカ、ハミウリで締めくくる。着いた当初は、朝食の質の低下を嘆いていたが、慣れてくると、一応のおいしさを感じられるようになった。今日は、暑くもなく寒くもなく、爽やかな一日のようである。いつものように HAU へ出かける。短期専門家として最後の日も、専門家室と中央実験室を往復して仕事に務める。専門家室では Short Report と専門家業務完了報告書の作成。午後5時の20分前に仕上げて、高橋調整員に提出する。中央実験室では、HAU 構内の表面水の水質分析結果について、分析を担当した Tran Thi Le Ha さんと共に、Nguyen Thi Vong 学部長に報告する。表面水のアンモニウムイオン濃度が、恐らくは糞尿の混入で危機的な状況にあるので、大学関係者への啓蒙の意味を込めて、HAU Journal へ報告してくれればと願っていることを伝える。更に、原子吸光度計用カソードランプ、試薬、消耗品の購入について、タインさんの相談に乗る。23日のフーラム社とフードン社で採水した試料の分析結果も出た。充分とは言えないが、一応の短期専門家活動の終了である。午後5時に出て、そのままの足で私の歓送会。場所は紀伊。9時前にホテルに帰り、荷物の整理。スーツケースの中はお土産ばかりである。

10月26日（土）

朝4時に起きて準備を整える。5時半にハノイホテルを出発。外はまだ真っ暗である。タインさんがホテルまで来て、ノイバイ国際空港まで見送ってくれ、タクシー代140,000VN ドンも払ってくれる。土地・水資源管理学部から至れり尽せりの歓待であった。6時過ぎに空港に着き、搭乗手続きと出国審査。タインさんと握手をし、手を振って別れる。空港内の売店で、ココナツクッキーと蓮の実を土産用で購入。ビジネスクラス用の待合室でしばし休憩。VN954/JL766共同運航便は8時ちょうどに動き出し、数分後に離陸する。すぐに雲の上。シャンペンと赤ワインで酔いがまわり、鶏ステーキの機内食の後は、寝不足もあって寝てしまう。ずーっと雲の上を飛び、午後2時36分（途中で2時間進める）成田国際空港に着陸。30回目の海外渡航も無事帰国する。国内線に乗り換え、午後9時過ぎに帰宅する。

おわりに—ハノイへの想い

「バングラデシュ農業大学院計画」の次の JICA プロジェクトはヴィエトナムでしようとして、ヴィエトナムなら南のカントー大学農学部に入りたいですねと、ダッカで話していましたが、結局、北の「ハノイ農業大学」へ教育研究支援をすることになりました。半ば気が乗らない形でのハノイでしたが、ハノイも度々訪れますと、やはり情が移ります。単純明快で即断な性格のせいでしょうか、住めば都、ハノイもいい所だと思うようになりました。今後はハノイを基点に、北部山岳地帯からラオス、ミャンマーへと、想いを拡げています。

文 献

- 国際協力事業団 1996 ヴィエトナム国ハノイ農業大学刷新計画事前調査団報告書、東京
 国際協力事業団 1997 ヴィエトナム国ハノイ農業大学強化計画長期調査報告書、東京
 国際協力事業団 2001 ヴィエトナム社会主義共和国ハノイ農業大学強化計画運営指導（中間評価）調査団報告書、東京
 国際協力事業団農業開発協力部 2003 ベトナム社会主義共和国ハノイ農業大学強化計画終了時評価報告書、東京
 黒澤 靖・江頭和彦 2003 ヴィエトナム北部山地の立地環境と傾斜地農業—サバを事例として—九州大学大学院農学研究学院学芸雑誌, 57: 223-230
 黒澤 靖・江頭和彦 2003 ヴィエトナム紅河デルタ農村における水質調査の方法と実態、日本土壤肥料学雑誌, 74: 551-556

Summary

During September 29 and October 26, 2002, I was dispatched as a short-term expert of soil science to Hanoi Agricultural University, Ha Noi, Viet Nam, where the JICA project-type technical cooperation of “Education and Research Capability Building Project of Hanoi Agricultural University” was executed. In the present article, activities as an expert in the field of soil science were summarized. In addition, daily life in and around Hanoi, sight-seeing to the Ha Long Bay, and excursion to Sa Pa, Lao Cai province, to survey land use and agricultural production in the hilly and mountainous region of Viet Nam were described.

The “Education and Research Capability Building Project of Hanoi Agricultural University” started in September 1, 1998 and successfully terminated in August 31, 2003 with the duration of 5 years. I have participated in the project through joining the teams of the preliminary survey, long-term survey and mid-term evaluation before dispatch as a short-term expert. The project purpose was to improve quality of research and education at three faculties (Faculty of Agronomy, Faculty of Land and Water Resources Management, and Faculty of Economics and Rural Development) of Hanoi Agricultural University. This was the first JICA project

in which combined cooperation of natural and social sciences were carried out, and the cooperation was practiced by the Faculty of Agriculture and the Institute of Tropical Agriculture, Kyushu University, with making consortium with the Faculty of Agriculture of Yamaguchi, Saga, Miyazaki, Kagoshima and Ryukyu Universities. The project activity in the Faculty of Agronomy and the Faculty of Land and Water Resources Management of Hanoi Agricultural University is followed as a cooperative research work financially supported by a P&P fund of Kyushu University.